

N  
I  
E

実 践 報 告 書

2022(令和4)年度



Newspaper in Education

群馬県N I E推進協議会



# Contents

ごあいさつ .....	群馬県 NIE 推進協議会 栗原 幸正	
主体的、対話的に学ぶ児童の育成 ～ NIE を通した思考力・表現力の育成～ 安中市立後閑小学校.....		6
自分の考えをもち、共に学びを高め合う児童の育成 —新聞を活用した授業や新聞への投稿を通して— 安中市立松井田小学校.....		10
2022 年度 NIE 活動実践報告書 板倉町立西小学校.....		14
「自他を認め、協働的に取り組む児童生徒の育成」を 目指すための NIE の活用 ～交流し・協働し、広い視野をもつための活動を通して～ 太田市立北の杜学園.....		18
新聞を活用して学ぶ児童の育成（指定 1 年目） —新聞に親しみ、活用する実践をとおして— 邑楽町立長柄小学校.....		22
教育活動を充実させるための手段としての NIE の活用 館林市立第二小学校.....		26
新聞に親しみ、様々なことに関心を持ち自分の考えを 表現できる生徒の育成 甘楽町立甘楽中学校.....		30
主体的に学びに向かう生徒の育成 ～新聞記事を活用して、自分の考えをもち、互いに深め合う～ 沼田市立薄根中学校.....		34
NIE 実践報告書 学校法人群馬常盤学園 常磐高等学校.....		40





## ごあいさつ

群馬県NIE推進協議会 栗原幸正  
(高崎健康福祉大学人間発達学部 教授)

コロナ禍という長く暗いトンネルに光明が差し始めた令和4年度は、日本全国でポストコロナを目指した教育活動が再稼働し始めた1年と位置づけることができるのではないのでしょうか。令和4年8月4日、5日に開催された第27回NIE全国大会宮崎大会においては、2日間にわたって対面での大会が久しぶりに開催され、2日目には宮崎県の児童・生徒による研究授業を基にした分科会が行われ、熱い協議が繰り広げられました。宮崎県のNIE教育関係者の高い教育への意識に支えられた大会の開催により、NIE教育再稼働の鮮烈な息吹を印象づけたことは言うまでもありません。群馬県においても、感染者や濃厚接触者が高止まりする中で、NIE教育に関わる先生方が、徹底した感染防止策を講じて、ますます重要性が高まるNIE教育の推進に真摯に取り組まれておられたことは、この集録に掲載された令和4年度に生み出された多様な実践成果をご覧になれば一目瞭然かと思えます。「コロナに負けない」を合言葉に、NIE教育を手がかりにして、ポストコロナの教育活動の再稼働に向けてご尽力いただいた群馬の教員の皆様方に心より感謝の言葉を申し上げたいと存じます。本当にご苦勞様でした。そしてありがとうございました。

さて、コロナ禍の中で、情報メディアの真偽が問われる状況が訪れ、さらに欧州における社会情勢がプロパガンダやフェイクという情報の持つ危険性を私たちに突きつけたのも令和4年度でした。それは、ネット社会の怖さを私たちに強く印象づけることとなり、情報の信頼性や確実性が大きく揺らぐ状況へと陥ってしまったと言わざるをえません。また、令和5年度に入るや否や、チャットGPTというAIが私たちの「考える」という人間にとって最も重要な側面に影響を与える事態が浮上してきております。まさに、情報の受け手側の私たち一人一人が情報を「考える」ことが大変重要になってきていると言えるでしょう。

しかしながら、昨年度の挨拶文でも記述したとおり、情報の真偽を「考え」「吟味」する力は、一朝一夕に育成できるものではありません。新聞の存在意義を再確認し、子どもたちの情報を読み取り、吟味する力を育成するためには、継続したNIE教育の推進が不可欠と言えます。令和4年度に実践された、実践指定校のNIE教育の充実に向けた取り組みは、次世代を担う子どもたちの育成に向けて大いに貢献していると言えると思います。

令和4年度は、実践指定校として、小学校5校、中学校2校、義務教育学校1校、高等学校1校に、質の高いNIEの実践を繰り広げていただきました。特に注目に値するのは全ての学校が、児童生徒に新聞とどう出合わせるかについての方法や内容を熟慮し、それを基に日常的・継続的にこれまでの教育内容にNIE教育をどのように組み込めば効果的なものになるのか、を授業を通して模索し続けてくれたことです。まさにそれは「当たり前のNIE教育とは何か」を問うという、ポストコロナにおけるNIE教育の門出に他ならない実践の数々と言えるでしょう。1年間にわたりご協力いただきました関係新聞各社をはじめ、明日の日本を創るNIE教育の実践に挑戦していただいた各学校の先生方や児童生徒、そして保護者や地域の皆様方に、心よりお礼申し上げます。

今後も、NIE教育に係る授業づくりをサポートする本協議会の活動がより広く、より意義深くなるよう取り組んで参りたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

# 主体的、対話的に学ぶ児童の育成

～ NIEを通じた思考力・表現力の育成～

安中市立後閑小学校

## 1はじめに

本校は群馬県安中市の北西に位置し、西に妙義山、浅間山を望む里山に囲まれた自然豊かな環境にある。学校の周囲は、美しい田園風景が続き、裏には中世古城の城山（じょうやま）がそびえている。令和4年度は、5名の新一年生を迎え、児童数45名でスタートした小規模校である。

本校の学校教育目標「心ゆたかに自ら学ぶたくましい児童の育成」を目指し、子供たちが考えた「ぼかぼか（みんな仲よく）きらきら（すすんで勉強）にここ（元気な子）を合い言葉に、児童一人一人を大切にされた確かな成長につながる学校づくりに努めている。

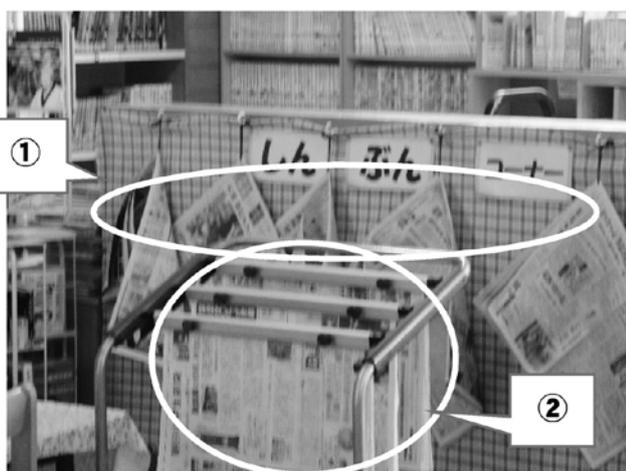
## 2実践の概要

今年度、児童が主体的、対話的に学び、思考力・表現力を育成する学習をより充実させるために授業改善を校内研修で取り組んだ。それに併せて、今年度よりNIE実践指定校として、新聞を活用し思考力・表現力の育成に取り組んできた。

## 3新聞の置き場と整理の方法

新聞は図書室に特設コーナーを作った。

- ①当日の新聞
- ②地域新聞・子ども新聞



バックナンバーも図書室内に新聞社ごとにまとめて平積みした。

## 4実践の内容

### 1)新聞への投稿

4月から、家庭学習で新聞投稿にチャレンジすることを呼びかけ実践した。地方紙に延べ57点（意見文：55 短歌：1 絵：1）の投稿が掲載された(1)（3月7日現在）。



### 2)5年国語の授業での実践

2学期に「新聞を読もう」の単元で、児童数分の地方紙（上毛新聞）を購入し、まず新聞の紙面について学習した。次に同日に発行された全国紙と見比べる学習を行った。同じ話題でも記事の内容が異なることに児童は気づき、情報の収集法を考えるきっかけとなった。

学習内容を発展させて、自分が興味を持った新聞記事を要約し、意見や感想を書き、地方紙に投稿した。



#### (1) 新聞に載った投稿を紹介するコーナー



#### (2) 当日の新聞を使って紙面の構成を学習



#### (3) 児童それぞれが紙面を確認

#### (4) 自分が興味を持った新聞記事の感想を書く

### 3) 5・6年合同による出前授業

1月25日に上毛新聞社編集局N I E・N I B担当記者による出前授業を実施した。5年は社会科「情報化した社会と産業の発展」の学習として、6年生はキャリア学習として行った。



取材現場で撮影した写真を見せても

(5) 新聞を見ながら記者の話を聞く

らいながら、取材する記者の視点や仕事の魅力を話してもらった。同じ現場を撮影した写真でも、報道ではインパクトある写真よりも、人や背景が映っていて、比較できる写真を使用するという話に、児童は「写真も考えながら撮影していると知って勉強になった」という感想を述べていた。

### 4) 図書集会での新聞紹介

2学期の図書集会で、図書室に2学期から新聞が置いてあることを紹介した。

### 5) 古新聞の利用

図書室に所蔵してあった新聞紙を使ったエコバッグづくりや遊び道具づくりを行った。新聞は読んだ後にも、有効利用できると児童は体験することができた。



(6) 図書集会

新聞で作ったエコバックを紹介

## 4実践の感想と今後の課題

一定期間、様々な新聞を図書室に展示したことで児童は新聞に対して感心を持つことができた。特に5年生の国語の授業実践では、同じ日の新聞でも記事の扱

いが違うことを実感でき、社会科の情報社会の単元へ教科横断的に学習をつなげることができた。日直のスピーチで、新聞から記事を探して発表している学年もある。図書室に行けば新聞がある環境づくりを継続したい。

また新聞の投稿が掲載されることは、児童の自己肯定感の高まりにつながった。自分の文章を読んだ家族や地域の方々に声をかけられるということが児童の承認欲求を満たし、自己肯定感の高まりにつながったものと思われる。一回の投稿掲載で満足してしまう児童に対し、次年度は継続して投稿にチャレンジできる工夫を行っていきたい。

また掲載される文章は新聞社で十分校正・校閲された文章であることを生かし、来年度はどのように校正・校閲されたのが比較し、よりよい表現力を理解する学習機会としていきたい。新聞記事を読んで感想を書く事にもチャレンジしたが、投稿数は少なかった。来年度はさらに新聞記事の感想文を奨励し、読解力、思考力向上につなげていきたい。

5年生の授業実践や、5・6年合同の出前授業は児童にとっても、担当職員にとっても学びが多い内容であった。来年度も今年取り組みを生かし、継続して行っていきたい。課題として、児童一人一人が新聞を広げて活動するには、児童用机が狭いことがある。5年の国語の授業実践では2時間目以降は机が広い特別教室で授業を行った。来年度も授業で新聞を扱う際には場所の工夫が必要である。

児童の思考力・表現力を育成する学習以外で成果があったこととしては、児童の投稿やN I Eの出前授業の様子が地方紙に掲載されたことで、保護者だけでなく、地域住民に学校の活動や児童に対して、今まで以上に関心を寄せていただけたことである。社会に開かれた学校としての取組を推進していく上で思わぬ成果があった。

# 自分の考えをもち、共に学びを高め合う児童の育成

—新聞を活用した授業や新聞への投稿を通して—

安中市立松井田小学校 報告者 上原 久志 富田 彩子 山内 隼

## 1. はじめに・実践の概要

本校は、令和4年4月に、旧松井田小学校、旧白井小学校、旧九十九小学校の3校が統合し、全校児童129名の新しい松井田小学校としてスタートした。広がった校区内には、碓氷峠の関所跡や松井田城址、茶屋本陣などの歴史遺産、めがね橋や丸山変電所跡などの鉄道文化遺産の他、麻苧の滝や裏妙義、小根山森林公園など豊かな自然があり、とても魅力的な教育資源に恵まれている。

本校では、昨年度、NIE実践校として、5、6年生を中心に上毛新聞への作文や俳句等の投稿及び授業での新聞の活用を行ってきた。今年度も、昨年度に引き続き同様の実践を行い、自分の考えをもち、共に学びを高め合う児童の育成に努めてきた。

## 2. 実践の内容

### (1) 校長の取り組み

学校が統合し、学校経営方針を新たに作成した。その中に、「高学年を中心に、新聞を教材として活用したり、新聞に投稿したりして、語彙力や表現力、情報活用能力を育む。」を位置づけ、年度始めの職員会議においた共通理解を図った。

そして、5月に行った全校朝礼において、「上毛新聞に、作文や詩、俳句などを積極的に投稿していきましょう。」と全校児童に呼びかけた。

その後、投稿内容については、5、6年生の担任に任せるとともに、時々、「ワークシートで考えた」や「新聞感想文」に投稿してみるようアドバイスをした。

新聞に掲載された作文は切り抜いて、児童玄関近くの壁に掲示し、全校児童に紹介をした。

### (2) 5年生の取り組み

#### ① 国語の単元「新聞を読もう」(7月)

- ・まず、教科書で説明されている新聞の構成について学んだ。そして、送られてきた新聞を用いて、その構成要素を探し出す活動を行った。
- ・送られてきた新聞を用いて、違う新聞社での記事の書き方を比較した。
- ・興味ある新聞記事を保存するためのスクラップノートづくりについて学習した。

#### ② 夏休みにスクラップノートづくりを課題として出した。



[新聞に掲載された作品の掲示]



[教室後ろのロッカー上に新聞を置く]

また、3学期にも、スクラップノートづくりの授業を行った。(下記、指導案参照)

③ 朝の会と帰りの会での取り組み(2学期～3学期)

- ・担任が、興味を抱いた新聞記事を、朝の会で紹介した。
- ・児童が、興味を抱いた新聞記事を、帰りの会で1日1人ずつ順番に紹介した。

④ 国語の単元「グラフや表を用いて書こう」(11月)

- ・送られてきた新聞の中から、根拠となる記事を取り上げて、資料に基づく意見文を書いた。



[作成したスクラップノートを廊下に掲示]



[3学期に行ったスクラップノートづくりの授業]

【指導案:スクラップノートづくりの授業】

○ 本時の学習

1 ねらい スクラップノートの内容を考える活動を通して、読み手に配慮した分かりやすい文章を作成することができるようにする。

2 展開

主な学習活動	主な発問	指導上の留意点
児童(生徒)の反応・発言等〔S〕	☆ICT 活用<分類>	
1 前時の学習を振り返り、本時のめあてをつかむ。(5分)  <めあて> 分かりやすいスクラップノートの内容を考え、作ってみよう。	☆電子黒板に新聞記事を提示する。 <可視化>	○本時のめあてを達成する見通しがもてるよう、新聞に関する学習について、振り返るよう促す。
2 スクラップノートの作り方を考える。(15分) S:新聞記事は一部分だけ切り取ればよいのかな。 S:それだと、完成したスクラップノートを見たときに誤解が生まれるかもしれないよ。	☆オクリンクのカードで、記事の写真や、スクラップノートに書くべき項目を確認する。<思考の整理・可視化>	○意欲的に学習を進めることができるよう、児童の発言をもとにしながらスクラップノートの作り方を考える。 ○分かりやすいスクラップノートを作ることができるよう、重要な部分だけ抜き出したり、難しい言葉は簡単な言葉に置き換えたりするよう伝える。
3 スクラップノートを作る。(20分) S:トルコ地震のニュースを見たから、関連する記事にしよう。 S:「隣国」という言葉は難しいから、「隣の国」という言葉に置き換えよう。 S:感想の欄には、不思議に思ったことやもっと知りたいことを書いてみようかな。	☆オクリンクで配布された記事の中から、興味のあるものを選ぶ。 ☆オクリンクで、作成したスクラップノートを共有する。 <共有>	○一人ひとりが興味のある記事を選ぶことができるよう、政治や経済、国際的な問題など様々な記事を配付する。 ○分かりやすい要約文を書くことができるよう、難しい言葉をそのまま抜き出している児童には、その言葉の意味を尋ねる。 ○自分の言葉で要約文を書くことができるよう、記事を読んだ後に、記事を見ずに内容を説明してみるよう促す。

		<p>○多くの児童がスクラップノートを作成させることができるよう、早くできた児童の文章を共有する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>◎評価項目（思）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作成したスクラップノートから、「読み手に配慮した文章を作ることができたか。」評価する。</li> </ul> </div>
<p>4 本時のめあてに対するまとめを確認し、学習内容を振り返る（5分）</p>		<p>○学習の要点を抑えることができるよう、振り返りを共有する。</p>
<p>&lt;まとめ・振り返り&gt;</p> <p>S：分かりやすいスクラップノートを作るには、読む人が分かりやすいように、難しい言葉を言い換えたり、大切なところをまとめたりすることが大切だ。</p>		

### (3)6年生の取り組み

- ①国語の単元「気になるニュースを集めよう」
  - ・一人一人が記事を選び、短学活で紹介した。
- ②社会の授業
  - ・学習内容に関連した記事を授業の中で取り上げた。
  - ・歴史新聞を各自作成した。
- ③上毛新聞社への作文の投稿
  - ・「新聞感想文」など、新聞を読んで感じたことや考えたことを作文に書き、投稿した。



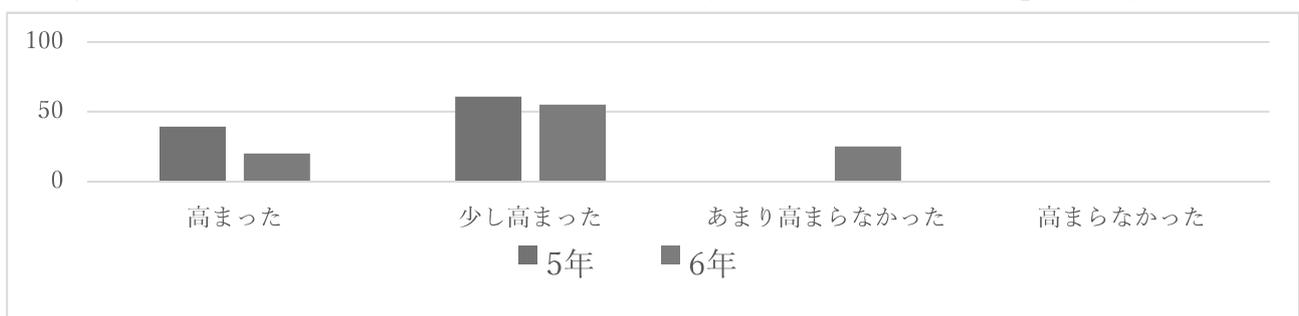
[3学期に行った東日本大震災に関連した授業]

### 3 実践の感想等

N I E の取り組みを進めてきて、1月に、5、6年生及び各担任を対象にアンケートを行った。

#### (1)児童へのアンケート

「授業などで新聞を活用してきたことで、新聞に対する興味は高まりましたか？」という質問への回答



(「高まった」「少し高まった」理由)

- ・毎日、新聞の記事のまとめを、帰りの会などで聞いていたので、社会のことを知ることができたから。
- ・ニュースをあまり見る機会がなく、家では新聞もとっていませんでしたが、新聞を読むことによって今起きていることを知ったり、漢字が分かるようになったりしたから。
- ・新聞を見てみると、いろいろなニュースや話題が載っていておもしろいし楽しいと思ったから。見出しだけを読んだり、気になるのは全部読んだり、いろいろな読み方ができると思ったから。
- ・自分の作文などが載っているのを見るとうれしいから。

(「あまり高まらなかった」「高まらなかった」理由)

- ・今は新聞はなくても、メディアで情報を知ることができるし、いろいろな情報がいっぺんに見られるから。
- ・たくさん字が並んで、それを読むのが苦手だから。

## (2)各担任、校長の感想

(5年担任)

- ・今回の取り組みを通して、子供たちの社会情勢に関する興味が深まったと思われる。授業の中では、新聞記事の紹介で取り扱った内容に関する話題が出て、新聞から得た知識を活用して試行することができていた。
- ・スラップノートづくりでは、記事を要約する力をもう少し高めることができればよかった。書いてある内容を理解せずに、はじめの文を要約して捉えている児童がいた。

(6年担任)

- ・授業で新聞を活用することによって、目的意識を持った学習活動につながった。また、学習内容への関心を高めることができた。
- ・様々な記事や考え方に触れることができ、深い学びにつながった。
- ・「見出し」、「リード文」、「本文」、「写真」の構成で、子供たちにもわかりやすく、各種発表の際の参考にすることができた。
- ・新聞への投稿が載ったとき、自己肯定感が高まったと思われる。

(校長の感想)

昨年度に引き続き、NIEの取り組みに参加させていただき、5、6年生を中心に、授業や帰りの会等での新聞活用や、上毛新聞への投稿を行った。

NIEの取り組み2年目ではあったが、今年度、学校の統合という大きな環境の変化があり、担任への授業等における新聞活用や、新聞への投稿文の作成について、依頼をしにくかったのが現状である。そのような中でも、新聞に投稿して文章が掲載された児童は、とてもうれしそうであり、新聞に対する興味が高まったと思われる。

また、子供たちは、月ごとに各社の新聞を目にすることができ、新聞社によって、取り扱っている記事や表現の仕方が異なっていることに気づいた。授業や帰りの会等で、新聞を活用することによって、新聞に対する子供たちの興味や関心は明らかに高まり、新聞の大切さを感じるとともに、社会に向ける目をもつことができたと思われる。

来年度以降、NIE実践校に指定されなくても、この2年間取り組んできたことを継続していくことは可能だと思われる。子供たちの知識を広げたり、文章力を高めたり、さらには自己有用感を高めたりするためにも、できることを継続していけたらと思う。

# 2022年度NIE活動実践報告書

板倉町立西小学校

渥美 愛花

## 1. はじめに

本校は、群馬県南東部に位置する小学校です。上毛かるた「つる舞う形の群馬県」でいうところのツルの嘴に位置します。北に渡良瀬川、南に利根川があります。また、周囲を栃木県、茨城県、埼玉県に囲まれています。自然に囲まれた環境の下、全校児童333名が元気に学校生活を送っています。

## 2. 実践のテーマ

本校のNIE実践にあたってのテーマを「新聞という情報に触れ、新聞を通して社会の出来事に関心を持ち、その出来事に対して自分なりの考えをもつ」と設定し、主に3年生と5年生を中心に実践を行いました。

## 3. 新聞の置き場所と整理の方法

本校では、職員玄関前に新聞コーナーを作り、近くにあるプレイルームで新聞の切り抜き作業が行えるようにしました。児童の興味を引く新聞の切り抜き、児童が作成した新聞なども掲示しました。



#### 4. 実践の内容

##### (1) 3年生の実践

###### 【新聞ワークシートの活用】

新聞に慣れ親しむことを目的として、新聞社で出されている新聞ワークシートを活用しました。新聞ワークシートには、季節ごとの内容があり、児童の興味を引きました。家庭で新聞をとっていない児童にとっても、興味の沸く内容になっていました。3学期はタブレットを活用して、新聞ワークシートをもとに、友達と意見を共有する活動も行いました。



##### (2) 5年生の実践

###### 【国語科の学習での活用】

国語科の学習では、新聞の構成について学習する際に活用しました。新聞の構成を学習した後、実際の新聞ではどうなっているのか児童自身が枠をつけたり、色分けしたりする活動を通して、新聞に親しむことができました。



### 【総合的な学習の時間での活用】

総合的な学習の時間では、SDGsについて理解を深めるために、1学期から調べ学習を行いました。2学期からは、自分の興味ある目標に関する新聞記事を集め、記事を読んで分かったこと、感じたことを模造紙にまとめました。新聞を読むことで、日本や世界の現状や、目標を達成するための取り組みについて具体的に知り、考えを深めることができました。



### (3) 上毛新聞の出前授業

社会科の授業では、上毛新聞の記者が講師で来校し、「現場に行く、写真を撮る、目撃情報を聞く、警察署に取材に行く」など、一つの記事ができるまでの過程を学びました。また、記事に載せる写真には、比較対象を写すなど相手への分かりやすさを考えて記事に載せている、ということも学びました。その後、社会の学習新聞作りにも生かすことができました。



#### (4) 5、6年生での取り組み

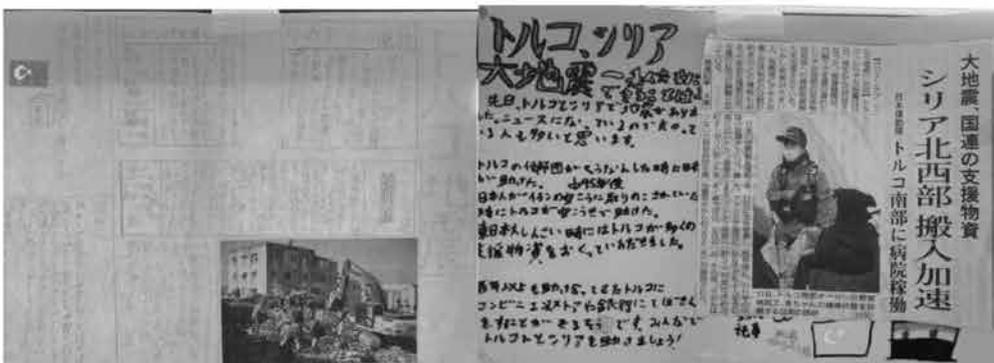
5、6年生の社会科の学習では、各単元のまとめとして新聞作りを行いました。作成した新聞を廊下に掲示し、児童同士も読み合うことができるようにしました。回数を重ねるごとに、読みやすい新聞にするにはどうすればよいかを考えながら作成することができました。



#### 5. 成果と課題

##### 【成果】

- ・新聞を身近に感じることができるようになった。
- ・新聞の記事を読み、自分の考えを書いたり、発表したりすることができるようになった。
- ・トルコ・シリア大地震の募金を呼びかける活動では、児童が自分で新聞を切り抜き、画用紙に考えをまとめてきた。⇒NIEが生かされている。



##### 【課題】

- ・家庭で新聞をとっている児童が少ない。⇒学校での環境整備が不可欠。
- ・様々な学年で取り組めるようにしたい。
- ・各教科とのつながりを考えながら、様々な場面で新聞を活用できるようにしていきたい。

# 「自他を認め、協働的に取り組む児童生徒の育成」を目指すためのNIEの活用 ～交流し・協働し、広い視野をもつための活動を通して～

太田市立北の杜学園

小須田美枝子

## 1. はじめに

本校は、群馬県初の義務教育学校として太田市の中心部、金山の麓に立地する開校2年目の新しい学校である。1年生から6年生を前期課程、7年生から9年生を後期課程とし、全校児童生徒802名が一つの学び舎で生活し、学年段階をⅠ（1～2年）、Ⅱ（3～4年）、Ⅲ（5～7年）、Ⅳ（8～9年）の四つのステージに区切り、78名の教職員が協働しながら9年間を見通した特色ある教育活動を展開している。

特に、異年齢による交流の機会を意図的、計画的に取り入れ、人間関係力や社会性を育むことを基本方針の一つに挙げている。その基礎を培うために、相手の考えを認めたり自らの考えを表現したりする一端として、新聞を活用し、視野を広げる良い機会としたいと考え、本年度より新規NIE実践指定校となり取り組んできた。

## 2. 実践の概要

緑豊かな金山を背に、市の産業を支える自動車工場が隣接する立地環境と、1年から9年が共に学ぶ特色を活かし、身の回りの出来事に関心を持ち、将来を展望できる広い視野と深い思考を育てるツールとして新聞を活用していく。そして、本校の研修テーマである「自他を認め、協働的に取り組む児童生徒の育成」をめざす一環として、新聞を授業に取り入れ有効活用し、読み比べたり投稿したりする中で、作品を認め合ったりよりよいものを作り上げたりする活動を通して、意欲を高め、読解力や表現力の育成につなげたいと考えた。そこで、次の3点を柱として実践を進めていくこととした。

- (1) 交流・・・新聞への投稿を奨励し、作品を鑑賞し合う
- (2) 協働・・・新聞を授業で活用し、学びを深める
- (3) 広い視野・・・様々な記事を読み、視野を広げる

## 3. 新聞の置き場所と整理の方法

本校は、敷地が広いので、置く場所についていろいろな意見が出されたが、できるだけ手に取って読みやすいように。7紙のうち一般紙は図書室の前に(写真1)、子ども新聞は図書室の中に(写真2)、経済新聞は後期課程が学ぶ3階の廊下に、それぞれ当日分を置いた。



【写真1：一般紙を置くコーナー】 →

【写真2：子ども新聞を置く図書室内のコーナー】→

また、新聞は一週間ごとにまとめて保管し、ひと月過ぎると図書室内の整理棚に移動している。



#### 4. 実践の内容

(1) 交流・・・新聞への投稿を奨励し、作品を鑑賞しあう

##### ① 創作の奨励

児童が、身の回りの自然事象に注目したり、自分自身を見つめたりする中で、自分の思いを形に表す方法として俳句や短歌、詩、作文の創作を奨励している。

投句用紙を職員室に置いておき、低学年は担任を通して、できた作品は投句BOXに入れ、定期的に担当が集める。(写真3) また、このBOXは校舎内にも置いておき、5年生以上は自由に持って行き、できた作品はBOXにいれ、いずれも上毛新聞の「ジュニア俳壇」「青春短歌」「ジュニア詩壇」に投稿している。



【写真3：俳句・短歌用紙コーナー】

##### ② 作品鑑賞のための掲示

新聞に掲載された作品は、図書室の廊下に月ごとに掲示している。(写真4) 図書室は、玄関の横にあり通行が多い場所であるのと、ガラス戸になっているので、掲示部分が大きく見やすいことによる。掲示は昨年から引き続き行っていることもあり、子ども達が足を止め、作品に見入る様子がみられる。また、作品は各クラスでも紹介し、よさを鑑賞しあうようにしている。



【写真4：新聞掲載作品の掲示】

(2) 協働・・・新聞を授業で活用し、学びを深める

##### ① 新聞記者による出前授業

5年生では、年度当初に新聞についてアンケートを実施した。「新聞に興味があるか」については、「あまりない・ない」が半数を超え、理由としては「家で新聞をとっていないから」が最も多く、「字が小さい。読むのが面倒」など児童にとって新聞があまり身近でないことを実感した。しかし、5月に「新聞を読もう」という教材の導入として、上毛新聞NIE担当の記者に出前授業(写真5)をしていただいた際には、児童は記者の話に目を輝かせ、「参考になった・ややなっ」が93%に上った。振り返りでも、「大事なニュースの見出しは黒地に白い字や写真がつくことを知った。これから注意して読んでみようと思う。」「新聞は、今となっては聞くことのできない話や声ののっている。調べ学習にも役立つことに気付いた。」「後からでも、何度でも読

めて便利。」等、新聞の特性や良さに目を向ける記述が多数あり、新聞がぐっと身近になったことがうかがえた。「初めて新聞をめくって読んだ。」という子もいたが、かじりつくように記事を追う児童の姿に、本物の持つ力と新聞に触れる機会を設けることの必要性を実感した。



【写真5: 記者による出前授業の様子】

この後、授業では「見出し、リード、本文」など新聞の構成や視覚的効果などの特長について知り、比べ読みをすることで、記事の広がりや一貫性などにも気付いた。同じ記事でも、注目する視点によって内容も写真も異なることに興味を示し、自分で情報を選んで紹介する学習では、「同じ記事でも感じ方は人によって違う。」ことを実感していた。さらに、説明文の授業で要旨と要約について説明をした際、児童から「そうか。要旨が見出しで、要約がリード文てことか。」というつぶやきが聞こえ、既習事項が汎用されている手応えも感じた。

## ② 国語科授業での活用

6年生では、意見文や論説文を書く際の手本として、コラム記事や実際の投書などの新聞記事を取り上げ、構成の参考にしたり、記事を比較したりした。特に教材化する際、複数紙をすぐに読める環境はととても有効だと授業実践した職員より話があった。

8年生では、国語の授業で短歌の鑑賞会を、9年生では俳句の鑑賞会をそれぞれ行った。8年は生徒が創作した短歌作品をGoogleフォームで提出してもらいスプレッドシートで一覧表を作成。それをストリームに張り付けて全員が閲覧できるようにして、鑑賞会を行った。さらに、作った作品はコンテストに応募し、入賞作品を掲示した(写真6)。新聞への投稿同様、よさを伝え合うことでモチベーションのアップ、次への創作意欲に繋がっている。



【写真6: 入賞短歌品の掲示】

## (3) 広い視野・・・様々な記事を読み、視野を広げる

### ① 新聞ワークシート・新聞感想文の活用

5年生は週末課題として新聞感想文を活用している。作文について苦手・嫌いと言った児童の割合が65%と高く、「書く」ことに抵抗がある児童が多い実態からだ。活用した記事は、上毛新聞「扉を開くNIE」に掲載されているワークシートや新聞記事を中心に、複数の中から選択する形にした。幅広い内容に触れさせたい、初読の文章に慣れてほしいという願いもあったため、世相を反映したものやSDGs、お笑いタレントのインタビュー記事など、できるだけ多岐にわた

るものを提示している。その結果、2学期末のアンケートでは、「文を書くことが前より好き・得意になった」と答えた児童が72%、「書く機会が増えたことで書く力がついたと思う」児童が82%おり、継続することの意義を感じている。これらも新聞に投稿し、複数学年で多くの児童の生徒の文章が掲載された。

## ② 図書室とのコラボ

小学生新聞は、ゆっくり読めるように図書室内に置いたが、なかなか注目されないという実態から、図書室とコラボして、「おすすめ記事の紹介コメントを書いたら、図書貸出プラス1冊券がもらえる」というイベントを企画したところ、新聞を手にする児童生徒が出てきた。誰かが読んでいると興味を引くようで、少しずつ読む姿が見られるようになった。

紹介された記事は写真7のようにコメントと共に掲示したが、様々な学年の参加がみられ、来年度も実施してほしいという声も聞かれた。



【写真7:図書室とのコラボの掲示】

## 5. 今年度の成果と次年度へ向けて

### 【成果・収穫】

○児童の国語授業の振り返りに、前よりできるようになったこととして、「文章を書くこと」と書いた児童が多かった。その理由として、「新聞感想文を書くことで条件作文に慣れた」「書くことが早くなった」等が書かれており、継続して週末課題としたことが、児童の自信につながっている。また、様々な記事を読み、考えが広がったことを自覚する記述も見られた。

○作品が掲載された児童生徒に対して、周りの声掛けが温かく認め合う素地となっている、それが、次の創作への意欲にもつながり、切磋琢磨しあう様子が見られる。

○「意見文を書いたので投稿したいがどうすればよいか」「授業で詩を創作させた」など、様々な学年で新聞投稿への意欲の高まりがみられ、職員の新聞に対する意識も高まった。

### 【次年度に向けて】

\*子ども新聞を手に取り読んでみて、その読みごたえに驚くと同時に、国語科に限らず他の教科においても教材の宝庫であることを発見した。次年度は教材として活用していきたい。

\*より多くの人にさらに新聞に興味をもってもらうような工夫を児童に尋ねたところ、「新聞読もうの会を作り、定期的に活動する」や「給食時に放送で記事を紹介する」など、柔軟な発想のアイデアがいろいろあったので、ぜひ実践していきたい。

\*児童生徒へのアンケートで、やってみたい学習として「新聞を作る」がとても多かった。新聞への肯定的な意識を大事にしながら作成にもチャレンジさせたい。

\*記事から必要な情報を読み取ることが難しい児童もいたので、読み取るポイントを示したり、分かりやすい文を用意するなど、個に応じた支援を工夫していきたい。

# 新聞を活用して学ぶ児童の育成（指定1年目）

—新聞に親しみ、活用する実践をとおして—

邑楽町立長柄小学校

山本 裕美

## 1. はじめに

本校は、群馬県の東部に位置する邑楽町にあり、町内には白鳥飛来地である多々良沼がある。児童数353人、14学級の小学校である。子どもたちの新聞を活用した学習をより一層充実させるため、今年度より新規NIE実践指定校となって取り組みを進めてきた。

## 2. 実践の実際

### （1）購読計画と整理方法

#### ①購読計画

10～1月 読売新聞、東京新聞、産経新聞、上毛新聞、毎日小学生新聞  
日経MJ、毎日小学生新聞

#### ②置き場所と整理方法



### （2）新聞コーナーの設置

2階の図書室の廊下に、新聞コーナーを設置した。（左上写真）新聞クリップを使用し、通りかかった児童や教員が随時、新聞を手にとって利用できるようにした。

また、廊下に新聞閲覧台（上写真）を置き、その場で児童が読めるよう工夫した。

### （3）新聞の整理

第二図書室（第一図書室の隣り）に新聞を整理する棚を設け、利用したい時に利用したい時の新聞が探せるように工夫した。（左写真）

## 3. 実践の内容

### （1）5年国語「新聞を読もう」の実践

図書室に置かれた複数の新聞社の新聞を見比べ、共通する構成要素（見出し・リード文・本文等）を確認した。その後、各自で新聞を読んで気になる記事を見つけ、それに対する自分の考えや感想をまとめる学習を行った。



単元の後半には、新聞記者を招いて「出前授業」を実施した。（左写真）

既習の新聞の構成を確認したほか、新聞社によって一面に取り上げるニュースが違うことや新聞の歴史、新聞を読むことの意義等についてお話をいただいた。

### （２）５年国語「あなたは、どう考える」の実践

上毛新聞「U22」に掲載されている小学生の意見文（複数）を読んで、説得力のある意見文に共通するポイントを見つける学習を行った。児童は、「主張が明確であること」や「主張を支える理由と根拠があること」

「予想される反論とそれに対する考えがあること」等に気づくことができた。

その後、それらのポイントを教科書の例文で確認し、それを踏まえて意見文を書く学習を行った。

### （３）新聞記事への感想文を書く実践（４．５．６年）

本校では業前の時間を利用し、月に３回、全校で短作文を書く学習を行っている。



この機会を利用し、日常の出来事や体験をまとめたり、読んだ新聞記事の感想を５００字以内でまとめたりする学習に取り組んでいる。（上左写真）

児童の書いた作文や感想文は新聞社に投稿し、今年度のべ２００名近い作品が朝刊に掲載された。掲載された文章は廊下に掲示し（上右写真）、そこを通る児童等がいつでも読めるように工夫した。

目的をもって書く活動に取り組み、書いた作品が実際の新聞に掲載されたことで、子どもたちは表現することへの自信や意欲を高めることができた。

### （４）５年国語「俳句を作ろう」の実践（俳句）

本単元では季節を表す言葉を入れながら、五七五の十七音で感動を伝える俳句を作る学習を行う。ここでは「上毛新聞ジュニア俳壇」の選者の方を講師としてお招きし、俳句の作り方についてお話をいただいた。（次ページ左写真）

講師の先生から、日常生活の中で見つけたことを俳句にするということや、身の回りのことを注意深く見たり、別の角度から見たりして俳句を作ること、説明を省くということ等、俳句づくりのポイントを学んだ。その後、学んだポイントを使って俳句を創作する活動につなげた。

児童の創作した俳句は上毛新聞の「ジュニア俳壇」へ投稿した。新聞に掲載された俳句は廊下を通る児童が誰でも目にするように、廊下に掲示した。（次ページ右写真）

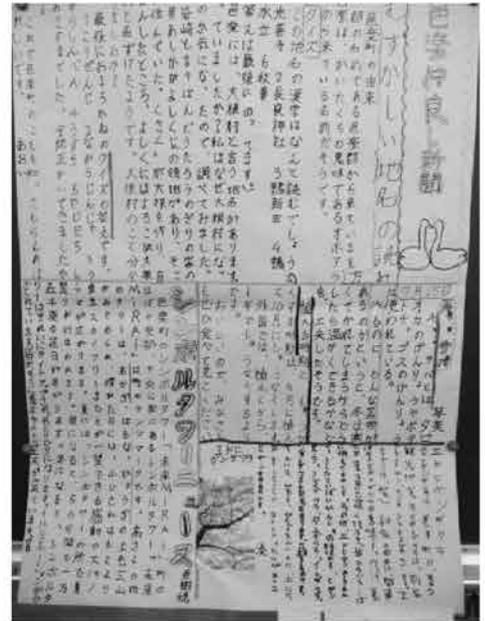


#### (5) 4年国語「新聞を作ろう」の実践

本校の4年生は総合的な学習の時間に、自分たちが住んでいる町の地名や歴史について調べる活動を行っている。ここでは総合的な学習の時間と国語科の学習を関連させ、調べたことを新聞に書いて分かりやすく伝える活動を行った。

国語科の学習では、まず図書室にある新聞を見ながら、書かれている内容や読み手に分かりやすく伝えるための工夫等を調べた。次に、教科書を使って新聞の一面には新聞名や発行日、発行者が書かれているほか、見出しを読むだけで何の記事かわかるようになっていること、文字だけでなく図や写真もあってわかりやすいこと等を確認した。

このような国語科の学習を総合的な学習の時間につなげ、調べたことや分かった事実などをもとに新聞の割り付けを考えたり分担して記事を書いたりしながら壁新聞にまとめていった。



#### (6) 6年国語「大切にしたい言葉」の実践



6年の国語科の単元に「大切にしたい言葉」（「書き表し方を工夫して、経験と考えを伝えよう」というのがある。ここでは、小学校での6年間をふり返って「座右の銘」にしたい漢字の一つを選び、その漢字と、それにまつわる経験について思い出し発表する学習を行った。

実践では、はじめに上毛新聞の「U22 私の声」に掲載された県内小学生の「座右の銘」に係る投稿文をモデルとして幾つか示し、全てに共通している書き方のポイントを考える学習を行った。

児童は、はじめに選んだ漢字とその意味を示し、次にその言葉を選んだ理由を記述していること、最後にその言葉に関連して自分はどんな生き方をしていきたいかという思いが書かれていることに気づいた。

その後、児童は気づいたポイントをもとに書く材料をワークシートに集め、文章を記述していった。前ページ下の写真の漢字は、児童が座右の銘として選んだ漢字である。

### (7) 5年国語「提案しよう、言葉とわたしたち」

本単元では、身の回りから言葉の使い方に関する課題を見つけ、学校生活や日常生活をよりよくするためにできることを学級の仲間に提案するという学習を行う。

ここでは、上毛新聞の「U22 私の声」に掲載された県内の小学生の文章（「敬語」や「さん」等、言葉に関わる提案文）を示し、それを基に日常生活における言葉の使い方に関する課題を書き出す学習を行った。また、それらの提案文を読み比べながら、「提案のきっかけ」「提案内容」「提案の理由と根拠」「まとめ」等の内容で文章が構成されていること等に気づいていった。

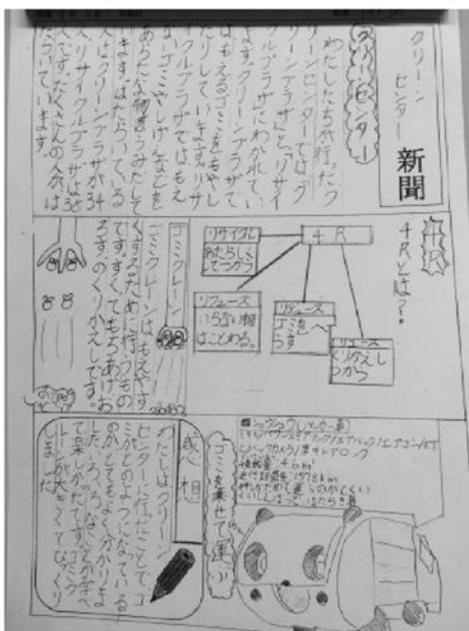
その後、身の回りの言葉の現状について調べたり、提案の根拠となる情報を集めたりしながら文章を記述し、それをもとにスピーチをする学習を行った。

### (8) 4年社会科「ゴミのゆくえ」「地震から暮らしを守る」の実践

#### ①「ゴミのゆくえ」の実践

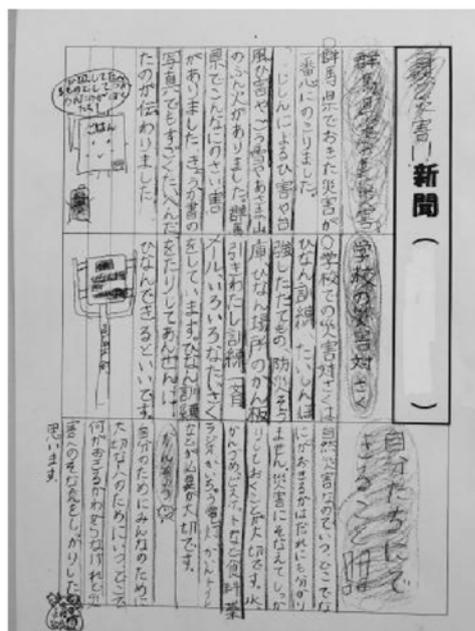
本単元では廃棄物処理の事業について、処理の仕組みや再利用、人々の協力などに着目し、見学・調査したり地図などの資料で調べたりしてまとめる学習を行う。

具体的には「分別して出され、収集されたゴミは、どのようにして処理されるのだろう」という課題のもと、クリーンセンターを見学し、分かったことを各自で新聞にまとめる学習を行った。（左写真）



#### ②「地震から暮らしを守る」の実践

本単元では、自然災害から人々を守る活動について聞き取り調査をしたり、資料で調べたりしながら、地域の災害に対する備えの現状を理解したり、自分たちでできることを考えたりする学習を行う。児童は学校の防災倉庫を見学したり、学校の耐震補強等について調べ、を新聞にまとめる学習を行った。（右写真）



## 4. 実践のまとめ

- ・ 日常生活における所感や新聞記事に対する意見、俳句等が新聞に掲載されることで、表現することへの子どもたちの自信や意欲を高めることにつながった。
- ・ 各教科等の学習の様々な場面で新聞を学習材として利用したり、学習したことを新聞にまとめる活動に取り組んできた。これらの活動を通して、子どもたちは新聞を一層身近なものと感じてきている。

# 教育活動を充実させるための手段としてのNIEの活用

館林市立第二小学校 川口 舞

## 1 はじめに

本校は、群馬県東部・館林市の中心部に位置する、児童数283名、14学級の小学校である。令和2年度時の関野利男校長先生のご指導の元、NIEの活用を始めた。令和3年度、令和4年度と、NIE実践指定校の認定を受け、豊かな体験活動とそれらを基にした表現活動の推進に力を入れている。年度当初には、教育活動を充実させるための手段であることを全職員で再確認し、目的意識をもって取り組んでいる。

## 2 実践の概要・成果

### (1) 子ども新聞の活用と新聞コーナーの設置

NIE実践指定校になり、朝日、毎日、読売、日経、東京、産経、上毛各社の新聞を無料で購読することができる。その際、銘柄を子ども新聞にすることもできる。

そこで、本校では、子どもたちの「新聞」へのハードルを少しでも低くなるように、朝日、毎日、読売については、子ども新聞を選択している。

また、それらの「新聞」が、子どもたちの眼に止まるように、設置場所を工夫した。図書室には全学年の眼に止まるように、子ども新聞を中心に置き、それ以外の新聞については、高学年の教室前廊下に置いた。

図書室では、日々の図書室利用の際に必ず見る貸し出しカウンターの前のため、常時楽しみにしている児童が複数いた。また、高学年の教室前廊下では、日常生活の中で気になったニュースについて、さまざまな新聞を読み比べる児童がいた。さらに、授業で扱う際に、多くの児童にとって、「新聞」が身近な存在になっていた。



### (2) 授業での活用

5年生の国語科「新聞を読もう」の学習では、新聞記事の読み方や複数の新聞に書かれている記事を読み比べることで、どんな違いがあるのかについて考えることができた。また、5年生の国語科「グラフや表を用いて書こう」の学習では、新聞に掲載されている統計資料を参考にしながら、自分の意見を効果的に表現することができた。「新聞」を教育活動充実のための手段をして用いることができた。

6年生の国語科「表現の工夫をとらえて読み、それをいかして書こう」の学習では、新1年生の入学

説明会で、新1年生の保護者向けに本校の良さを伝える学習活動を行った。その中で児童が「新聞が読める学校」という良さを文章に表した。児童の文章では、「友達との話や本を読むことも大事だが、新聞を読んで世の中の経済などを知ること大事だと思う。だから小学生の普通の生活に新聞を取り入れるという学校の行動はとてすばらしいと思う。」とある。

授業の中で活用していくことを繰り返し継続していくことで、児童の生活と「新聞」とのかかわりが強まっていったことを実感できた。また、記事の表記は文章表記のお手本になるという面においても、教育活動を充実させる手段として活用できる可能性が大きい。



### (3) 出前授業・投稿

本校では、子どもたちの学習をより充実させるために、専門家の力を活用する出前授業を積極的に取り入れている。社会科見学に先立って、見学先について豊富な取材資料等を持っている新聞記者を招き、見学のポイント、メモや質問の仕方、見学のまとめ方などの授業をしてもらっている。新聞記者による出前授業のおかげで、校外学習や社会科見学、尾瀬ネイチャーリングが充実したのはもちろんのこと、学習や見学後のまとめも、大変充実したものになった。

また、本校では、「全校俳句作り」に継続して取り組んでいる。毎週金曜日に俳句用紙を配布し、翌週に提出している。俳句用紙には、二句書くことができるが、一句でもよく、提出も強制ではなく、子どもたちの自由意思である。提出された俳句は、校長がすべて上毛新聞「上毛ジュニア俳壇」に投稿している。そこで選ばれた俳句は、上毛新聞「朝の一句」に顔写真とともに掲載されたり、「ジュニア俳壇」に掲載されたりしている。また、各学級担任が学校行事や体験活動の後に書かせた作文や日記などのコピーを校長に提出することになっている。提出された作文等は、上毛新聞「みんなのひろば」や「記事を読んで感想文を書こう」に投稿している。

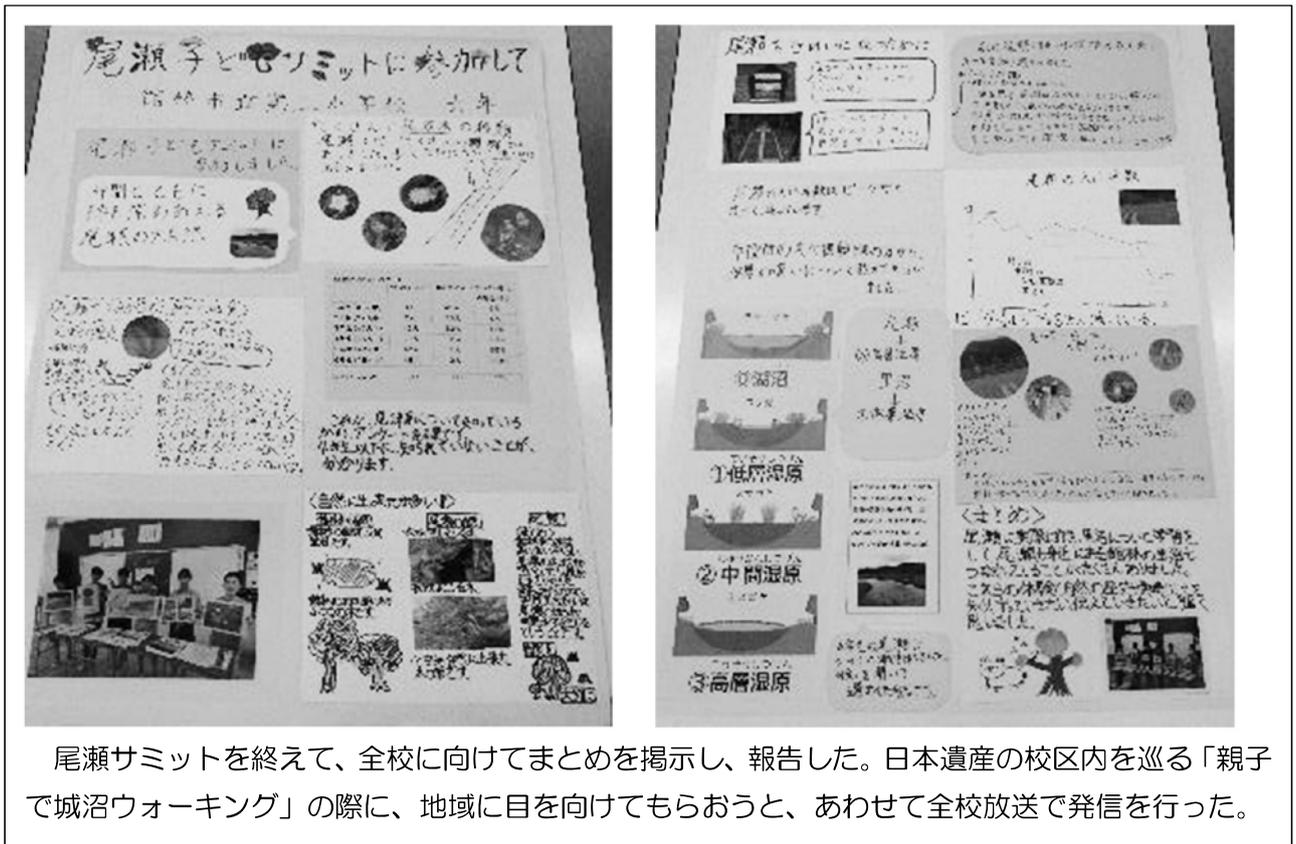
自分の書いた俳句や作文、日記などが、新聞に掲載されることの教育的効果は、非常に大きい。子どもたちの自信となり、自己肯定感を高めることにつながる。また、保護者等の喜びを通して、親子の会話のきっかけ作りになり、新聞を身近な存在と感じ、新聞とのかかわりも強くなる。そこで生まれた子どもたちの創作意欲や執筆意欲の向上がこのような教育活動を続けていく中で重要だと考える。

今年度は、「尾瀬サミット」の群馬県代表に選ばれ、発表する機会があった。発表内容を考える中で、館林にある日本遺産「里沼」と「尾瀬」を比較検討する観点が児童自ら見いだせたり、俳句で尾瀬についての思いを詠んだりといった取り組みをすることができた。NIEを広義に捉えて、教育活動に活用できたと考える。



尾瀬ネイチャーリング前の上毛新聞記者による出前授業。←

オンライン開催になった尾瀬サミットで発表する児童たち。黒板には尾瀬について詠んだ俳句を掲示。←



尾瀬サミットを終えて、全校に向けてまとめを掲示し、報告した。日本遺産の校区内を巡る「親子で城沼ウォーキング」の際に、地域に目を向けてもらおうと、あわせて全校放送で発信を行った。

(4) 応募・「よみとき新聞ワークシート」の活用

新聞記事を読む機会を作る試みとして、日本新聞協会の「いっしょに読もう！新聞コンクール」と上毛新聞社の「群馬県小中高生新聞感想文コンクール」に取り組んでいる。3年続けて、個人奨励賞と学校奨励賞を受賞している。日本新聞協会の「いっしょに読もう！新聞コンクール」は5・6年生が取り組み、上毛新聞社の「群馬県小中高生新聞感想文コンクール」は、全学年で取り組み、全校で長期休みの課題として提示し、新聞を読む機会作りをしている。

また、理想科学工業株式会社の新聞教材係が運営する「よみとき新聞ワークシート」に会員登録し、朝日学生新聞社、朝日新聞社、茨城新聞社、上毛新聞社、新潟日報社、山陽新聞社、中國新聞社が作成している「よみとき新聞ワークシート」の提供を無料で受けている。「よみとき新聞ワークシート」には、新聞記事をもとに、問題を作成したワークシートが毎週提供される。記事の内容が幅広く、児童の実態に即したワークシートがを見つけやすく、新聞を教育活動に活用する際の教員の助けになっている。

話題にのぼっている食材の記事から、児童に身近な有名人の考えが書かれている記事などがあり、児童の実態に即して内容を選び、書くことができる。問題として、記事の内容の読み取りから、考えを問うものまで段階を追って書かれている。←

### 3 基本的な立場・考え方から見えてきたこと

#### (1) 新聞は「教材」の宝庫である

『新聞に掲載されている記事の内容は、小学校の全学年・全教科・全領域の教育活動と関連している。また、記事の表記は、文章表記のお手本である。新聞は、教育活動を充実の手段として活用できる豊かな可能性を持っている。』

⇒2 実践の概要・成果の(1)(2)から、全学年・全教科・全領域の教育活動と関連していることを再確認できた。「教材」の宝庫をより活用できるようにしたい。

#### (2) N I Eは教育活動を充実させるための一つの手段である

『N I Eの活用を目的化してしまうと、教育活動が矮小化されてしまう。N I Eは教育活動を充実させるための一つの手段であるという立場に立つと、N I Eの活用の規準が明確になる。すなわち、教育活動を充実できる場合に限定して活用すればよいのである。』

⇒2 実践の概要・成果の(2)(3)から、活用規準を教育活動充実のための手段という点を明確にしたことで、N I Eの活用が目的化せずに、さまざまな広がりを実感できた。

#### (3) N I Eを広義に捉える

『N I Eの「N」(Newspaper)を「新聞」と限定的にとらえるのでは、「新聞にかかわる人・もの・こと」と広く捉えると、N I Eの可能性が大きく開かれる。』

⇒2 実践の概要・成果の(3)から、「新聞にかかわる人・もの・こと」への広がり可能性を見いだせた。

#### (4) 子どもが新聞と関わる機会を強くする

『N I Eを、授業に「新聞」の記事を活用するという立場に限定してしまうと、N I Eの豊かな可能性を狭めてしまう。とりわけ、小学校においては、なおさらである。小学校では、子どもたちと「新聞」とのかかわりが強まるような活用をしていくことが大切である。そして、そうすることが、中学校以後のN I Eの充実をもたらすことにつながる。』

⇒2 実践の概要・成果の(3)(4)から、小学校以降の生活においても「新聞」を通して、社会とのかかわりの中で自分の考えをどのように構築していくとよいかを考える機会になった。

### 4 今後の課題

教育活動を充実させるための手段として3年続けて、N I Eを活用していく中で、子どもたちの成長を感じる時がたくさんあった。子どもたちの内面の創作意欲や執筆意欲は、体験活動に表現活動が合わさり、自信と比例していくことによって高まっていくと考える。そのたびに、N I Eの豊かな可能性を再認識できた。多忙な現場の教師たちにどのように広め、一人でも多くの教師が、教育活動を充実させるための手段として活用できるように、効果を実感できる地道な取り組みを続けていきたい。

# 新聞に親しみ、様々なことに関心を持ち自分の考えを表現できる生徒の育成 甘楽町立甘楽中学校

## 1 はじめに

本校は、第一中学校と第二中学校が統合して平成28年度4月1日に開校した学校である。甘楽町白倉の小高い丘に建ち、遥かに上毛三山を臨み、自然に恵まれた環境に立地している。全校生徒数313人、12学級の中学校である。

学校教育目標では、「学ぶ意欲を持ち心豊かなたくましい生徒の育成」を目指している。その中で、新聞を読むことで社会や多様な考えに触れ、自らの考えを広め、深めることをねらいとし、昨年度に引き続き、学校生活の中で新聞に触れ合う機会を増やせるよう、新聞活用の場を模索しながら取り組みを進めてきた。

## 2 実践の概要

NIE実践2年目として、校内研修副題「プレゼン力の向上」を視野に入れながら「新聞に親しみ、様々なことに関心を持ち自分の考えを表現できる生徒の育成」を目指す中で、日頃から新聞に触れ合う機会を増やし、新聞から得た情報について自分自身で考えを持ち、表現できるようにしたいと考えた。

具体的には、次の2点を柱とした。

### (1) 新聞に触れる機会を増やす

短学活でのスピーチ。日直がその日の記事から1つを取り上げ、自分の考えをまとめて発表する。

### (2) 新聞を活用し、学習や学校生活に生かす

国語科を中心とした授業等で新聞を活用し、意見文の記述や文章読解につなげる。

## 3 新聞の置き場所と整理の工夫

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、年度当初は各学年の交流を控えながら全学年の生徒が新聞を読めるよう、置き場を設定した。新聞の置き場は各学年の教室に近いところとし、1年生は図書室前（写真1）、2年生は教室前ホール（写真2）、3年生は玄関ホール（写真3）とした。図書室前には前日の新聞、各ホールには当日の新聞を置き、図書委員会を中心に新聞の交換を行った。



写真1 1年生用（図書室前）



写真2 2年生用（教室前ホール）



写真3 3年生用（玄関ホール）



		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロイロノートの準備シート（図10）に記入する。</li> </ul>	<p>まとめられるようにする。</p> <p>〈準備シートの内容〉</p> <p>①記事の見出し ②なぜ（何が）気になったか ③それについてどう思うか ④その話題がこれからどうなっていくと思うか ⑤自分にできることは何か</p>
3	表現する	<p>○意見文にまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ロイロノートの下書き用シート（図11）に意見文を書く。</li> <li>・下書きの推敲が終わったら、原稿用紙に清書し、新聞を貼る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・下書きが仕上がったら、根拠が適切であるか、誤字脱字はないか等、よりよい文章になるよう推敲する。</li> </ul>
4	振り返る	<p>○学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループで意見文を読み合い、感想を伝え合う。</li> <li>・振り返りシートを記入する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の生徒の文章を読み、説得力のある書き方や意見と根拠のつながりについて考えられるようにする。</li> <li>・今回の学習を今後の書きや読みに生かそうとする意識をもてるようにする。</li> </ul>

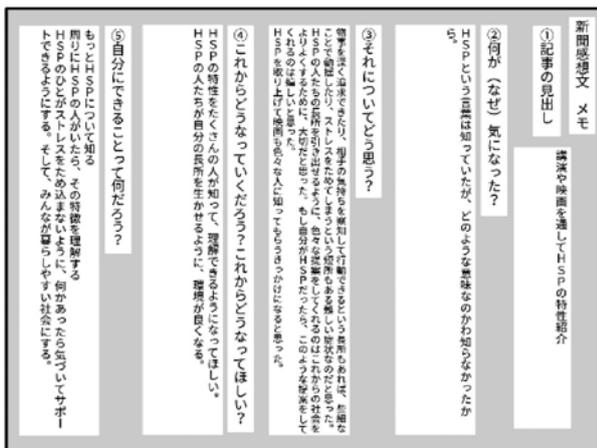


図10 新聞感想文用準備シート



図11 新聞感想文用準備シート

② 2年生「モアイは語る—地球の未来—」

第4時「段落に見出しをつける」という学習で、新聞の見出しがどのようにつけられているのか（図12）を学んだ上で、的確な言葉を選べるようにした。特にこの授業は大学でスポーツ紙を作成するサークルに所属する教育実習生が、自身の経験を生かして、見出しと文章との関わりに触れながら指導した。

図12 授業で使用した新聞記事



【委員会活動での活用】

① 図書委員会による新聞の紹介

多くの生徒が新聞に興味をもてるよう、おすすめの記事や図書に関する記事などを図書だよりの中で

紹介した。

② 生徒会本部役員による生徒会新聞の発行

実際の新聞のレイアウトや見出しの付け方を参考にして、記事を書いた（図13）。初めは単調なものだったが、文字の太さや大きさ、写真を入れるなど読みやすくなるよう工夫していた（図14）。

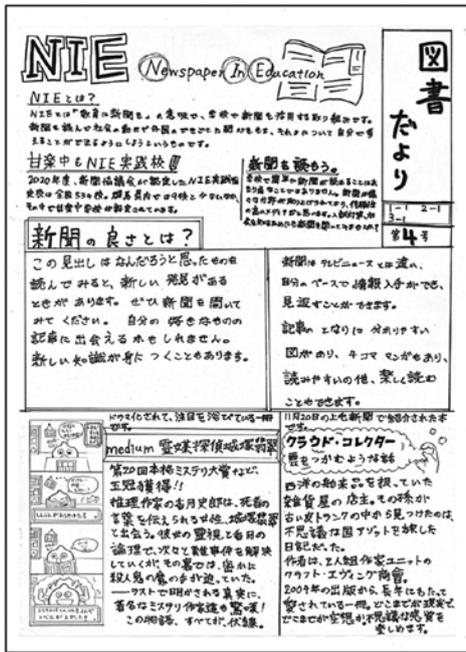


図13  
図書だより



図14  
生徒会新聞

5 実践の感想と今後の課題

昨年度から引き続き実践を行っているため、日直が新聞を読みワークシートにまとめることは習慣化し、1日の中で時間を見つけて取り組むことができている。それ以外でも鉄道に関する記事やスポーツの試合の記事を比較して読むなど、自分の好きな分野の記事を熱心に読む生徒の姿も見られた。また、教員が短学活や授業で紹介した記事を読んだり、日直が発表した記事を探したりする生徒もいて、周囲の人の働きかけで新聞に興味をもてるようになってきたと感じた。生徒のスピーチの中には、ニュースについての感想だけでなく、詩（文芸）や広告を読んで感じたことを書いているものもあった。そうした発表を他の生徒も興味をもって聞く様子が見られ、様々な情報が詰まった媒体としての面白さも感じていたようである。

2年生に行ったアンケート調査では、「新聞を読む機会が増えたか」という問いに関しては、7割の生徒が「増えた」「まあまあ増えた」と回答した。生徒自身が自発的に新聞を読むということは難しいため、新聞に触れる機会を意図的に設定することは重要だと感じた。また、「新聞を読むことの良さ」について様々な意見が挙げられたため、今後も新聞に親しむ気持ちをもち続けられるよう指導していきたいと感じた。

<p>○新聞を読むことの良さとは何だと思いますか。 (主な意見)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色々な情報を手に入れられる。</li> <li>・テレビで見たことについてより詳しく知ることができる。</li> <li>・語彙力・読解力が上がる。</li> <li>・1つの出来事でも、新聞社によって捉え方が違い、たくさんの表現の仕方を知ることができ、視点を広げられる。</li> <li>・テレビのニュースなどでは取り上げられていない様々な地域の出来事について知ることができる。</li> <li>・世の中で起こっていることがわかる。</li> </ul>
--	--

# 主体的に学びに向かう生徒の育成

～新聞記事を活用して、自分の考えをもち、互いに深め合う～

沼田市立薄根中学校 教諭 新井久仁美

## 1 実践の概要

本校は、NIE 実践校として指定を受け、5年目の実践を行ってきた。

- (1) 技術科での実践
- (2) 国語科での実践

## 2 新聞の置き場と整理の方法

配送された新聞を多目的室前の廊下に置く場所を設け、新聞の名前が見えるように立てて掲示した。特集記事や生徒に関心をもってもらいたいような記事は平置きにして掲示した。授業で使用する場合は、その学年の所に移動して活用した。



## 3 実践内容

- (1) 技術科の実践

①単元名「エネルギー変換の技術の原理・法則と仕組み」 Cエネルギー変換の技術

### ②単元の目標

エネルギー変換に関する基礎的・基本的な知識を習得するとともに、エネルギー変換に関する技術が社会や環境に果たす役割と影響について理解を深め、よりよい生活や持続可能な社会の構築に向けてエネルギーに関する技術を適切かつ誠実に評価し活用する。

### ③指導方針について

○国内外のエネルギー問題、社会問題、環境問題への興味を高め、主体的に学習に向かわせるために、新聞記事を活用したり、新聞社の編集委員との連携を図ったりする。

○調べたことをもとに話し合いをする場面において、生徒たちの考えが一方に偏ってしまった場合に、教師や外部講師が書籍や新聞等の資料を紹介し、多様な視点で話し合いが深まるように支援する。

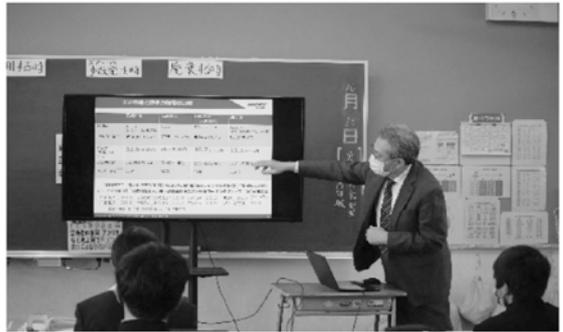
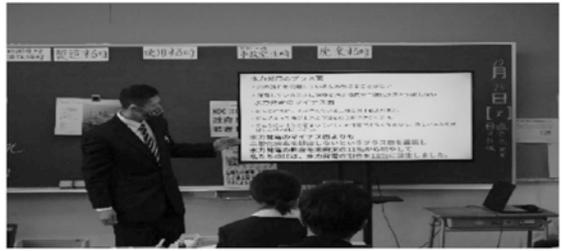
### ④本時の学習

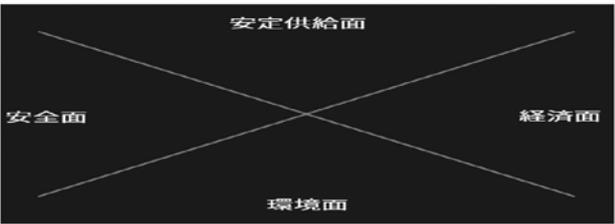
- (1) ねらい

今までの学習を振り返り、新聞記事・書籍等の資料や外部講師の話をもとに安全面・安定供給面環境面・経済面の視点で見極め 2030 年の日本の発電電源構成（エネルギーミックス）を考える。

- (2) 展開 ●予想される生徒の反応

学習活動	時間	指導上の留意点及び支援
1. 前時までの活動を振り返る。 ●ペットボトルで風力発電ができた。 ●電気エネルギーが光エネルギーに変換された。 ●白熱電球は大部分が熱に変換され、損失が大きい。つまりエネルギー変換効率が低い。 ●海外の油田で深さ数千メートルから採掘され	4 分	○今までの学習を振り返らせるために、風力発電の実験、照明機器の実験の様子を記録した写真・実験器具等を提示する。 ○3名の外部講師（エネルギー関連企業、自然保護協会、新聞編集者科学担当）による説明をまとめたスライド資料を提示すること

<p>た。調査の段階で500億円もの費用がかかる。そのため数十年掛けて採算に合う採掘が必要である。化石燃料の採掘には経済性が重要視される。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●再生可能エネルギーにも、安定供給面や環境面において課題があった。</li> <li>●温暖化の被害は国内外で深刻だった。特に乾燥地帯の干ばつによる被害が甚大であった。</li> <li>●世界の温室効果ガスの半分は、世界人口の10%を占める先進国が排出している。</li> <li>●未来を選ぶのはみなさん。どういう社会にしたいか、みなさんにかかっている。</li> </ul> <p>2. 本時の学習課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>&lt;めあて&gt;        持続可能な社会の構築のためのエネルギーミックス(発電電源構成割合)について考えよう。</p> </div>	<p>で、今までの活動を振り返られるようにする。</p>  <p>○社会からの要求、生産から使用・廃棄までの安全性、出力、変換の効率、環境への負荷や省エネルギー、経済性に着目し、発電電源構成を再度考えることを伝える。</p> 
<p>3. これまでの学習で調べた発電方式の長所・短所をもとに班ごとに考えた発電電源構成を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●火力発電は、ベースロード電源として安定供給のために必要な電源だ。</li> <li>●水力発電は、発電所建設時に環境面への影響が大きいことが分かった。</li> <li>●太陽光発電は使用時には環境負荷が少ないが、パネル製造時と廃棄時に環境面への影響もある。</li> </ul>	<p>5分</p> <p>○学習者用端末を用い、班ごとに発表する。(各班1分の発表、全4班)</p> <p>○外部講師からの助言を受けることで、問題点や課題等に気づかせ、後半の発電電源構成を考える活動につなげられるようにする。</p> 
<p>4. 社会情勢の影響によるエネルギー価格高騰などの経済面での課題や万が一の事故が発生した場合の被害の深刻さなどの環境面・経済面・社会面での課題について理解する。</p> <p>指導者と外部講師の討論形式の説明を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・CO2排出量を抑えることが喫緊の課題(指)</li> <li>・再生エネ比率100%に近い国々の紹介(指)</li> <li>・再エネは発電量が気象条件に左右され、安定供給面に不安がある。停電のリスクがある。(外)</li> <li>・調整電源としての火力発電の必要性(外)</li> </ul>	<p>5分</p> <p>○発電電源構成を再考する必要があることを理解させるために、指導者・外部講師より、最新のデータや資料を提示し、エネルギー価格高騰など先の読めない世界情勢や万が一の事故が発生した場合の心身の健康被害や莫大な損害賠償発生などの影響について問題提起する。</p> <p>○政府が原子力発電所の新設や再稼働を進めていることを伝える。一方で、地元住民や近隣住民の理解が十分に得られていない</p>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界情勢によりエネルギー価格が高騰（外）</li> <li>・政府による原子力発電の推進（指）</li> <li>・原発は事故が起きると被害が大きい（指）</li> <li>・放射性廃棄物の処分方法も、処分場所も決定していない。（指）</li> <li>・ウラン鉱山で働く人にガン等の健康被害。運転時だけでなく燃料調達の間も考慮すべき。（指）</li> <li>・バランスが必要であり、国民的な議論も必要である。（外）</li> </ul>		<p>ことも伝える。</p> <p>○各発電方式のプラス面・マイナス面を理解できるよう討論形式で説明し、正解はなく、最善策を考えることを促す。</p> <p>○ライフサイクルアセスメント(教科書P.193)を説明することで、資源採取・製造・輸送・使用・廃棄など全ての段階を通して評価することを促す。</p>
<p>5. 指導者と外部講師からの問題提起について学級全体で意見交流する。(学級全体)</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>●再生可能エネルギーは温暖化を防げるが、停電のリスクが増えるのは困る。安定供給マイナス面</li> <li>●&lt;原発近隣住民&gt;事故が起きれば全てを奪われる。環境マイナス面 安全マイナス面</li> <li>●&lt;一般家庭&gt;原発により電気代が安くなれば生活が楽になる。経済プラス面</li> </ul> <p>6. 技術の見方・考え方を働かせながら、発電電源構成を考える。(グループ)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●排出量の多い火力発電は見直す必要がある。</li> <li>●エネルギー価格高騰は経済面に影響がある。</li> <li>●再生可能エネルギーは気象条件によって不安定だから、ベースロード電源は必要だ。</li> <li>●原子力発電はデメリットもあるが、メリットを重視して採用したい。</li> </ul> <p>7. 発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2つの円グラフを比較表示しながら発表する。</li> </ul>	<p>6分</p> <p>20分</p> <p>5分</p>	<p>○学習支援ソフトのシンキングツールを活用し、全員の生徒に同時編集させる。</p> <p>○安全面・安定供給面・経済面・環境面のそれぞれの側面に対し、プラス面はピンクのカード、マイナス面は水色のカードで入力させる。</p> <p>○どの立場での意見なのかを可能な範囲で記入するように助言する。</p>  <p>○指導者と外部講師とによる問題提起を踏まえ、発電電源構成の再考を指示する。</p> <p>○長所のみを理由に発電電源構成を設定している班に対して、短所を減らすという視点でも考えるよう助言する。</p> <p>○発電電源構成を再考させ、前回作成した電源構成と変容がなくても構わないことを伝える。</p> <p>○前回作成した電源構成と本時に作成した電源構成の違いを説明させる。</p>
<p>8. 本時の学習課題を確認し、学習の振り返りとして自分なりにまとめる(個人)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●選挙権を得たときに、エネルギー政策について</li> </ul>	<p>5分</p>	<p>○今後の生活において、エネルギー問題について自分の意見・意思を持てるよう今後も学んでいく必要があることを伝える。</p>

て、政党を選ぶ時に役立ちそうだ。	○外部講師からの指導・講評を受ける。 ○学習を振り返った感想を学習者用端末に記述させ、数名の生徒に発表させる。
------------------	--

**【評価項目】（評価の観点）**

○安全面・安定供給面・環境面・経済面の観点から持続可能な発電電源構成を考えることができる。  
（円グラフの作図・ワークシート・感想の記述）

**⑤成果と課題**

〈成果〉

- ・エネルギーミックスについて ICT を利用し視覚的に示すことで説明する時間の短縮や充実を図ることができた。
- ・思考を可視化するツール（新聞記事の切り抜き、スライド等）を多用することで、生徒の思考を可視化することができた。
- ・外部講師（エネルギー関連企業、自然保護協会、新聞編集者科学担当）を利用しながら授業を行うことで、生徒が学習内容について深く学ぶことができた。

（3）国語科での実践

①単元名「投稿文 情報を関連づけて根拠を明確に示す」－新聞記事や SNS を活用して投稿文を書く－

②教材の目標

「情報を関連づけて根拠を明確に示す」文章として投稿文についての学習をする。本教材では、一つの課題に対して多様な考えがあることを想定し、それらの考えを尊重しながらも、どのような読み手に対しても説得力をもつ発信の仕方を身につけさせることをねらいとしている。

③本時の学習

中心となる一文をもとに、根拠となる情報を整理して、構成を考え投稿文を書く。

④成果と課題

〈成果〉

- ・情報を集めるために数社の新聞を読んだ。
- ・新聞記事に自分の投稿が載ることで興味をもって新聞に触れる生徒が増えてきた。

〈課題〉

- ・説得力のある文章にするために情報を取捨選択するのが難しかった。

**4 感想と今後の課題**

〈成果〉

- ・新聞置き場のところで、新聞を手にする生徒が増えてきた。
- ・多様な情報の中で生徒が新聞に触れ、新聞のよさについて理解してきた。
- ・NIE への取り組みに全校で取り組むために各学年に NIE 担当の組織を作った。

〈課題〉

日常的に読新聞を読もうとする習慣をつけるのは難しい。

# 投稿

## チャレンジ

U22

### 心強い味方がいてくれるから

テストがある日の朝は、祖母は必ず私に「今日は頑張れ」と言ってくれます。祖母は誰よりも私を応援してくれていて、朝聞く祖母の言葉は何度も勇気づけられてきた。

ある日、ネットニュースを見てみると、一つのニュースが目にとまりました。10年に1度という大寒波の日、大学受験に向かうタクシーの中で、時間通り無事に会場にたどり着けるかどうか心配している受験生がいた。無事に会場に着き、降りて

いく受験生に、運転手さんが「これでコートでも買って受験頑張つて」と5000円玉を渡してくれましたという記事だった。

### 改めて自然災害への備えを

2011年3月11日、私が1歳の時に起きた東日本大震災。1歳の私にも揺れているのが分かるくらい大きな地震だった。その体験から地震は日常生活に大きな影響をもたらすと知り、地震に備えた対策が必要だと思った。

これから30年以内に起こる確率が高いとされている南海トラフ地震。最悪の場合、東日本大震災の10倍以上の死者が出るという研究もある。さらに、1週間以内に同規模程度の別の巨大地震が起る確率も高いとされている。

地震は誰も防ぐことができない、予測も難しい自然災害の一つだ。3月11日を前に、私は地震に限らずさまざまな災害に備え、食料の備蓄をしておいたり、避難経路や避難場所を確認したり、日頃から家族とよく話し合っておくことが大切だと思っ

応援してくれた優しい運転手さんの話にとても心が温まった。

この記事を読んで、応援してくれる人がいることがどんなに心強く、素晴らしいことなのか改めて分かった。どんな時でも私には応援してくれる人がいる。そばに心強い味方がいるということこそ、これからも忘れずになりたい。

### 読書をうまく生活の中に

私の学校には朝読書の時間がある。もともと私は漫画を読むのが好きで「読書」というものにあまり興味がなかった。けれど、ある日友達がお薦めの小説を貸してくれた。その作品がとても面白く、同じ作者の作品を何冊も借りて読み込んだ。そのことがきっかけで、今では朝読書以外の時間でも読書をしている。漫画好きな私だが、最近では小説を読んでいる。時間にも面白さを感じている。

そこで、現代の子どものための「読書離れ」に目を向けてみた。文部科学省によると、近年の生活環境の変化、さまざまなメディアの発達・普及を

### 厳しい言葉には意味がある

1週間の中で「勉強しなさい」とか「ゲームしないで勉強しなさい」と言われる日が絶対あります。

この言葉を聞くと、内心イライラしてしまいます。勉強しているところを見たいくせに、そんなことを言ってくるからです。よく親が見るのはゲームをしている時だけです。

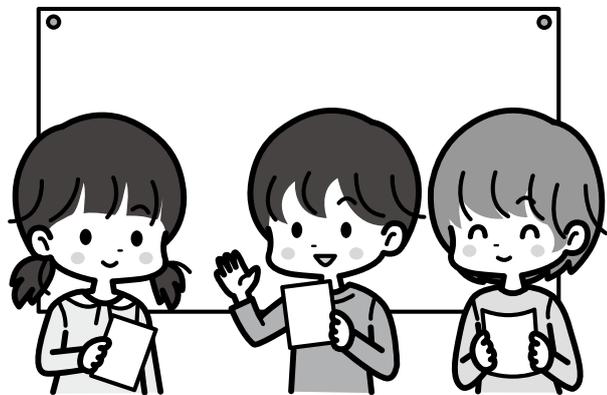
でも、そんな厳しい言葉も、考えてみると、僕の内面を思っているんじゃないかと思いたくありません。本当に大変なのは、

親から何も言われなくなつた時だと思えます。その時はもう親に見捨てられてしまったという事です。

そんなことがないように、親から何も言われなくなつた時だと思えます。そして親の期待に応えられるように、ゲームもするけれど、もちろん勉強も頑張っていきたいと思います。

ている。

なので「表紙やタイトルが気になつたから」というような簡単な気持ちからでも本に興味を持ち、読んでいくことは大切だと私は考える。「読書離れ」ではなく、読書を生活の中にもっと取り入れた「読書生活」という言葉の方が、よく聞かれるようになればいいと思っている。



# NIE実践報告書

学校法人群馬常盤学園 常盤高等学校

## ①実践概要（テーマ・ねらい）

冬季講座の国語配当時間（90分×5）を使って

新聞やTVの報道で語られることは、連続する事象の一部をある一定の基準に基づいて切り取ったものである。故に、語られた事実は切り取り方によっていくつものバリエーションを持つことになる。

ある事象についても誰が、どのように切り取ったかによって伝えられるニュアンスが異なる。「ニュースで言っていたから」とその内容を鵜呑みにしてしまうと、それを語った人にとっての真実（または解釈）を一面的に、無批判に受け入れてしまうことになる。事実（事象）は一つかもしれないが、真実とは人の数だけ存在し得るということを理解し、興味を持つことによって、自身が物事を多角的にとらえ、自分の頭で考えて行かなければ、情報にあふれたグローバルな未来をよりよく生きて行くことはかなわなくなるであろうことを学んでほしい。

## ②新聞の置き場及び整理方法

単独クラスでの実施のため、HR後方に設置された生徒用ロッカーの上辺に、各社ごとに仕分けして常設。

## ③実践の内容

1年S組

1. 年S組21名（男子14名、女子7名の合計21名のクラス。）を7人ずつ3つのグループに分ける。
2. 各グループ、新聞2紙を担当し、その中から
  - a：地方版（群馬版）を読み比べ、同じ一日の出来事が新聞によって、取り上げる記事やそのとらえ方（紙面における割合など）の違いに気づく。
  - b：全国版の中から、特に関心の強い記事を追い、a同様、各紙の切り取り方、取材の姿勢等の差異を見出す。
3. 各グループとして意見を集約した後、個人でa・bの2点についてレポートにまとめる。  
体裁については一切制限を加えないこととする。

## ④実践後の感想と今後の課題

各グループ内で話し合いを進め、グループとして考えをまとめたはずであるが、個々人のレベルで完成し、提出されたレポートはやはり、各自の目線・切り取り方が反映さ

れていて、同じテキストデータであっても「切り取り方によっていくつものバリエーションを持つことになる。」という①実践の概要に挙げた「ねらい」通りの結果となり、「一面的に、無批判に受け入れてしまうこと」について考えさせる場を提供できたと思われる。

今後の課題としては、複数の新聞を読み比べて行くという行為が実際の個々人の家庭環境にあってはなかなかないということである。ニュース（新聞・TV・Net）メディアの垣根を超え、ニュースソースの出所を確認したうえでの比較・分析、そして個人としての判断を継続していけるかということである。

発信源、立場の違いで同じ「事実」がいかにバイアスがかけられ個人の「真実」として語られているかということを念頭に物事に当たっていける環境づくりを考えねばならない。

グループとして共通のテーマを選択し、決定までの過程



選んだ記事内容の比較作業中



2紙の比較のメモ



2022年12月26日

同じ事柄を取り上げた新聞の比較

現在、世界にはさまざまな新聞社があるが、それら全てが同じ事柄に対して同じ内容を書いているわけではない。そこで私たちの班では「毎日新聞」と「産経新聞」の地方版で同じ事柄を取り上げている記事ではどのような差異があるのかということと、地方版の方と同じ二社の新聞の全国版の中で特に関心の高い記事を追い、同じ事柄を取り上げている記事ではどのような差異があるのかを比較する。

23 (群馬) 12版 令和4年(2022年)12月

### 温泉文化の無形遺産登録を 17道県知事の会が設立総会



温泉文化の国連教育科学文化機関(ユネスコ)無形遺産登録を目指す17道県が連携する知事の会の設立総会が、オンラインで開かれた。会長に就任した熊本県の浦島郁夫知事は「全国に魅力あふれる温泉がある。登録に向けて全力で取り組む」とあいさつした。今後、関係省庁への要望などを進める。

群馬県の山本一太知事は、高齢化による後継者不足や、新型コロナウイルス禍の影響を踏まえ「日本経済の再生にこそタイムリーだ」と早期に実現する必要性を強調した。

和歌山県の「坂吉伸知事は「みんなで一緒に文化など、世界にないコンセプトを磨く必要がある」と指摘。鳥取県の平井伸治知事は「現場の知恵を横につなげ、文化を整理することが重要だ」と話し、石川県の船越知事は「全国的な盛り上がりが必要だ。知事会で情報共有していきたい」と述べた。

11月11日には有志の国会議員連盟が設立。来年3月には企業や研究団体を交えた全国推進協議会を立ち上げる。最遅で令和8年の無形文化遺産登録を目指す。

### 無形遺産登録 実現を

温泉文化女将の会などが氣勢

温泉文化を国連教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化遺産に登録することを目指す県内の関係団体が13日、前橋市内で会合を開いた。山本一太知事や県議、旅館女将らで作る群馬女将の会、観光団体の役員らが「大きな夢を現実したい」「県外に声をかけ国民票を上げよう」と気勢を上げた。

県などの働きかけで11月に与党国会議員の議員連盟や全国知事の会が相次いで発足している。会場では登録への体験について「失われた日本文化の保存に努めたい」と述べ、外国人観光客向けに変えたりせず、マシナガやアノメスにだけない日本文化を世界に発信すべきだと強く訴えた。【田所柳子】



温泉文化のユネスコ無形文化遺産登録へ気勢を上げる県内の関係者—前橋市の群馬会館で

県警はまた、公用車を建物の外壁にぶつけたら罰金10万円を出さなければならないとして別の警部補を所属長注意。商業施設で財布など約5万4000円分の品物を盗んだとして、本部の事務職員を減給100分の103カ月分の懲戒処分とした。事務職員は11月に依願退職した。

の書き方を教える際、実際の報告書として作成すれば部下の成績になる」と考え、被害者らの被害を偽造。まことに報告書の作成を部下に押しつけて責任を押しつけた。悩んだ部下が9月、別の上司に報告した。

↑ 地方版 左:12月10日の産経新聞 右:12月14日の毎日新聞

新聞の内容

群馬県や和歌山県、鳥取県などの17道県が、温泉文化を国連教育科学文化機関(ユネスコ)への登録を目指している事について

地方版での比較。

(1)見出し:毎日新聞では「絶対に実現する」という氣勢が感じられるが、産経新聞ではただ登録するために設立総会をしたということのみを書いてあるため、「実現したい」という思いを感じにくい; (2)本文 1:毎日新聞では群馬県のことのみが書かれており視野が狭いと感じたが、産経新聞ではさまざまな県の知事などの取材も掲載されていて、毎日新聞に比べて視野が広いと感じた; (3)本文 2:毎日新聞では実際に記者が会合に行き取材をしているため、取材力が高く会合が行われたという事実がほとんどだが、産経新聞ではオンラインで行われた総会の様子を見たというだけであるため、毎日新聞に比べて取材力が低いと感じた; (4)写真:毎日新聞では会合の実際の写真が載せられていて、これから各地で本格的に頑張っていくという氣勢が伝わり、アピールになるような写真だった。比べて産経新聞ではオンライン総会を行っている山本一太知事の写真のみが載せられており、本文の取材などでは他県の知事のコメントなども載せられているが写真はそれのみであるため各県の「実現したい」という思いが伝わりにくい。

全体を通して、毎日新聞では記者が実際に会合に行くなどして、取材力が高くその時の様子がダイレクトに伝わってくる文章になっていた。また産経新聞の方ではオンライン会議の様子を見たのみであるため取材力は毎日新聞に比べて低いと思ったが、各県の知事のコメントなど、毎日新聞に比べて本文に載っているコメントが多く、また産経新聞の方ではオンライン総会が行われた事実をストレートに述べているため客観的意見が少ないと思った。

### 比較してみたの感想

今回国語の冬季講座で同じ記事を取り上げた新聞の読み比べをしてみて感じたのは、新聞社によって同じ事実がこんなに違う解釈ができる文章になるのか、と改めて実感した。普段私は新聞に触れない生活をしてきたため、新鮮な気持ちで授業に臨んだ。以前に現代の国語の授業で「事実なのか考えなのか」という文章にも同じようなことが書かれていたが、それを実際に実感し、筆者の客観的な意見が入っているか入っていないかでこんなに受け取り方が変わってくるのかと驚いた。今回は友達との意見交換で気づくことが多かったため、今後自分で新聞を読む時は「この文章は意見かそれとも事実か」ということを見分け、他の新聞と比較し自分なりの解釈を見つけていきたいと思った。

## 【これまでの実践校】

- ◆2004年度 笠懸中、万場高、創世中等教育、昭和南小、高崎大類小
- ◆2005年度 万場高、創世中等教育、昭和南小、高崎大類小
- ◆2006年度 伊勢崎境剛志小、伊勢崎境西中、太田東中、西邑楽高、富岡高瀬小、高崎寺尾小、前橋新田小、前橋一中
- ◆2007年度 富岡高瀬小、高崎寺尾小、前橋新田小、前橋一中、高崎西部小、太田沢野中央小、太田生品中、沼田小
- ◆2008年度 太田沢野中央小、太田生品中、沼田小、伊勢崎四中、館林二中、太田女子高、尾瀬高、館林高定時制
- ◆2009年度 太田生品中、伊勢崎四中、館林二中、太田女子高、尾瀬高、板倉北小、前橋元総社中、太田高
- ◆2010年度 太田生品中、板倉北小、前橋元総社中、太田高、桐生新里北小、前橋大利根小、伊勢崎殖蓮中、勢多農林高
- ◆2011年度 板倉北小、新里北小、前橋大利根小、伊勢崎殖蓮中、勢多農林高、高崎城東小、太田西中、太田強戸中
- ◆2012年度 前橋原小、高崎片岡小、伊勢崎豊受小、千代田東小、桐生広沢中、太田西中、太田強戸中、館林商工高
- ◆2013年度 前橋原小、伊勢崎豊受小、千代田東小、高崎高松中、桐生広沢中、太田西中、太田強戸中、昭和中、館林商工高、群馬法科ビジネス専門学校、大泉保育福祉専門学校
- ◆2014年度 群馬大附属小、伊勢崎豊受小、高崎高松中、太田西中、沼田南中、昭和中、藤岡中央高、西邑楽高、館林商工高、群馬法科ビジネス専門学校、大泉保育福祉専門学校
- ◆2015年度 群馬大附属小、高崎南小、桐生川内小、太田西中、沼田南中、館林四中、甘楽二中、藤岡中央高、西邑楽高
- ◆2016年度 高崎南小、桐生川内小、昭和東小、館林四中、甘楽中、前橋富士見中、高崎一中、沼田南中、太田西中、西邑楽高
- ◆2017年度 昭和東小、沼田利南東小、高崎新高尾小、桐生相生中、太田東中、前橋富士見中、高崎第一中、沼田沼田南中、尾瀬高
- ◆2018年度 高崎新高尾小、沼田利南東小、太田東中、桐生相生中、高崎大類中、嬭恋中、沼田薄根中、伊勢崎高、尾瀬高
- ◆2019年度 沼田利南東小、館林八小、高崎大類中、高崎一中、沼田薄根中、嬭恋中、ぐんま国際アカデミー中高等部、伊勢崎高、吉井高
- ◆2020年度 太田綿打小、館林八小、沼田薄根中、高崎一中、嬭恋中、ぐんま国際アカデミー中高等部、伊勢崎高、吉井高、高崎商
- ◆2021年度 館林二小、館林八小、安中松井田小、太田綿打小、甘楽中、ぐんま国際アカデミー中高等部、沼田薄根中、高崎商、常磐高

2023年6月発行

---

2022（令和4）年度

## 群馬県N I E実践報告書

編 集 群馬県N I E推進協議会事務局  
発行者 群馬県N I E推進協議会  
事務局 〒371-8666 前橋市古市町1-50-21  
上毛新聞社内  
電話 027-254-9933（編集局代表）  
<http://www.gunma-nie.org>

---